

長崎県幼児教育センターだより



No. 31 2026. 9. 29



～幼児期と小学校の学びのつながい～

7月のセンターだよりで1年生の国語の授業を紹介しましたが、今回は算数の授業を紹介します。

学習内容は「長さ比べ」でした。机の縦と横のように、直接並べて比べることのできないものは、どうやって比べたらいいかを考えます。子どもたちは、自分の机の中に入っている物を使ったり、自分のてのひらを使ったりして、思い思いに比べていました。長さの違う鉛筆を並べてみたり、1本の鉛筆を使うのだけれども、隙間が開いたり、てのひらの開き具合がまちまちだったり・・・大人から見たら、「それでは正しく測れない」と思う方法ばかりです。



でも、先生はそれを自由にさせていました。正解を教えるのではなく、子どもに考えさせ、まちがいにも気付かせます。先生がわざとまちがう役になって、子どもから正しい測り方を引き出す場面もありました。

子どもたちは、立ったり、動き回ったりして、「活動」しているので、45分間が楽しく生き生きとした時間になりました。やり方が分かったら「分かった!」「できた!」と発見する喜びを感じ、自らもう一度やってみるという姿が見られました。

幼児期に育みたい資質・能力として、以下の三つが示されています。特に、「豊かな体験を通じて」ということを重視しています。

育みたい資質・能力（幼児期）

- (ア) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (イ) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (ウ) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

今回の1年生の算数の授業で、子どもが試行錯誤しながら、正しい測り方を見つけていくという過程は、この時期の子どもの発達にとっても合っています。学ぶことの楽しさが感じられました。

また、幼児期に遊びの中で体験してきた、長さや水のかさ、数を比べるといった体験が、算数の学習へとつながっているということも分かります。小学校への学びのつながりを考えたときに、幼児期に大切なことは、豊かな経験の中で自ら工夫し、試行錯誤しながら、本物の「分かった!」や「できた!」を積み重ねること、そして、「自ら考えようとする姿勢」を身に付けておくことです。

保育の中では、「どうしたらいいかなあ。」「どうする?」「どうしてうまくいかないのかなあ。」のように「どう」で始まる言葉をかけることも一つのコツかもしれません。子ども自身が考えるきっかけをつくることで、主体的に学ぼうとする力が育まれていくのではないのでしょうか。

お知らせ

県教育センターと共同で開催している新規採用研修が10月20日21日に、中堅教諭等資質向上研修が10月21日に、ミライ on 図書館で行われます。申し込みをされた方は事前のオンデマンド研修をお忘れなくお願いいたします。

今回、残念ながら参加ができなかった方に向けて、ダイジェスト版にはなりますが、オンライン研修を予定しています。後日、開催案内をお送りいたしますので、参加をご検討ください。

文責：室野亜津子

～独り言～

私が長崎大学教育学部附属幼稚園長をさせていただいているときに、文部科学省「幼児教育の学び強化事業」の委託調査研究に取り組むことになりました。調査研究のテーマは「遊びにおける幼児の主体性と教師の意図のバランスに関する研究」だったのですが、研究を通して得た学びの中で特に「同僚性」の大切さに改めて気づかされました。

幼稚園教育要領解説には、次のような文が記載されています。(途中省略しています。)

幼稚園教育においては、…「環境を通して行う教育」が基本となるのである。…このような環境を通して行う教育は、幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つものである。

バランスよく絡み合う教育とはどのようなものか、考えれば考えるほど保育に携わる職員は日ごろの保育に「悩み」や「迷い」が生じました。子どもの「自発的な遊び」、教師による「環境構成」など、子どもの主体性を育むための保育を突き詰めれば突き詰めるほど「教師の意図が強すぎて、子どもの『したい』『やりたい』をつぶしているのではないか」、「教師の意図する方向に誘導しているのではないか」といった思いが保育記録にも書かれるようになりました。

しかし、日ごろから子どものことや保育について語り合っていましたし、週に一度の園内研修でも研究テーマに関する話し合いを行っていましたので、一人ですべてを解決するということではなく、仲間と一緒に考えることによって悩みや迷いが少しずつ解消されていったように感じます。

十数年前に、ある教育関係の冊子に記載されていた「白い丸いテーブル」の話です。ある小学校の職員室に白い丸いテーブルがあり、職員がそのテーブルを囲んで一息ついたり情報交換をしたりしていたそうです。誰かが困っていれば相談し、力になったりする「同僚性」が発揮されている職場でした。しかし、校長が代わってからは勤務中の無駄をなくすためにそのテーブルが撤去されると、次第に職員それぞれが孤立し、自分のことで精いっぱいなの雰囲気が生まれ、殺伐とした学校に変貌したという内容でした。

本センターでは、園内研修を充実させるためにいろいろなことを提案させていただいていますが、2026.9 保育ナビで秋田喜代美先生が「立ち話での子どもの姿の共有こそ研修の出発点」と書かれているように、子どもや保育についてお茶を飲みながら気軽に話ができる「同僚性」を築くことが大切です。子どもの姿や保育について安心して話せる職場には、学び合いが生まれます。教育・保育に携わる者にとってそうした職場こそ幸せな環境であると自信をもって言えます。

長崎県幼児教育センター長 高田敏彦